

078531-000-4

特65-580

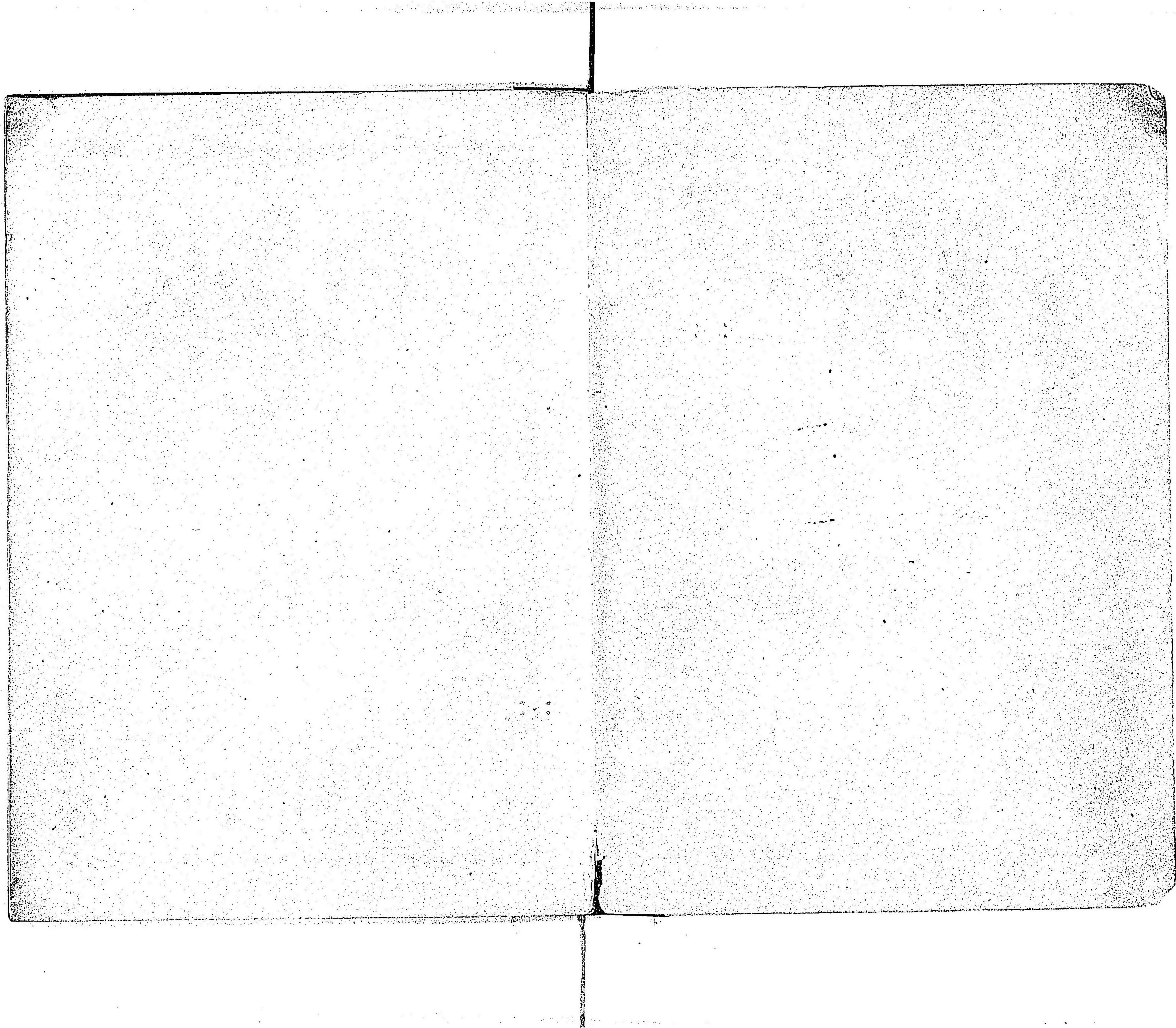
日本助辞詳解

中村 五十一郎 / 著

M27.8

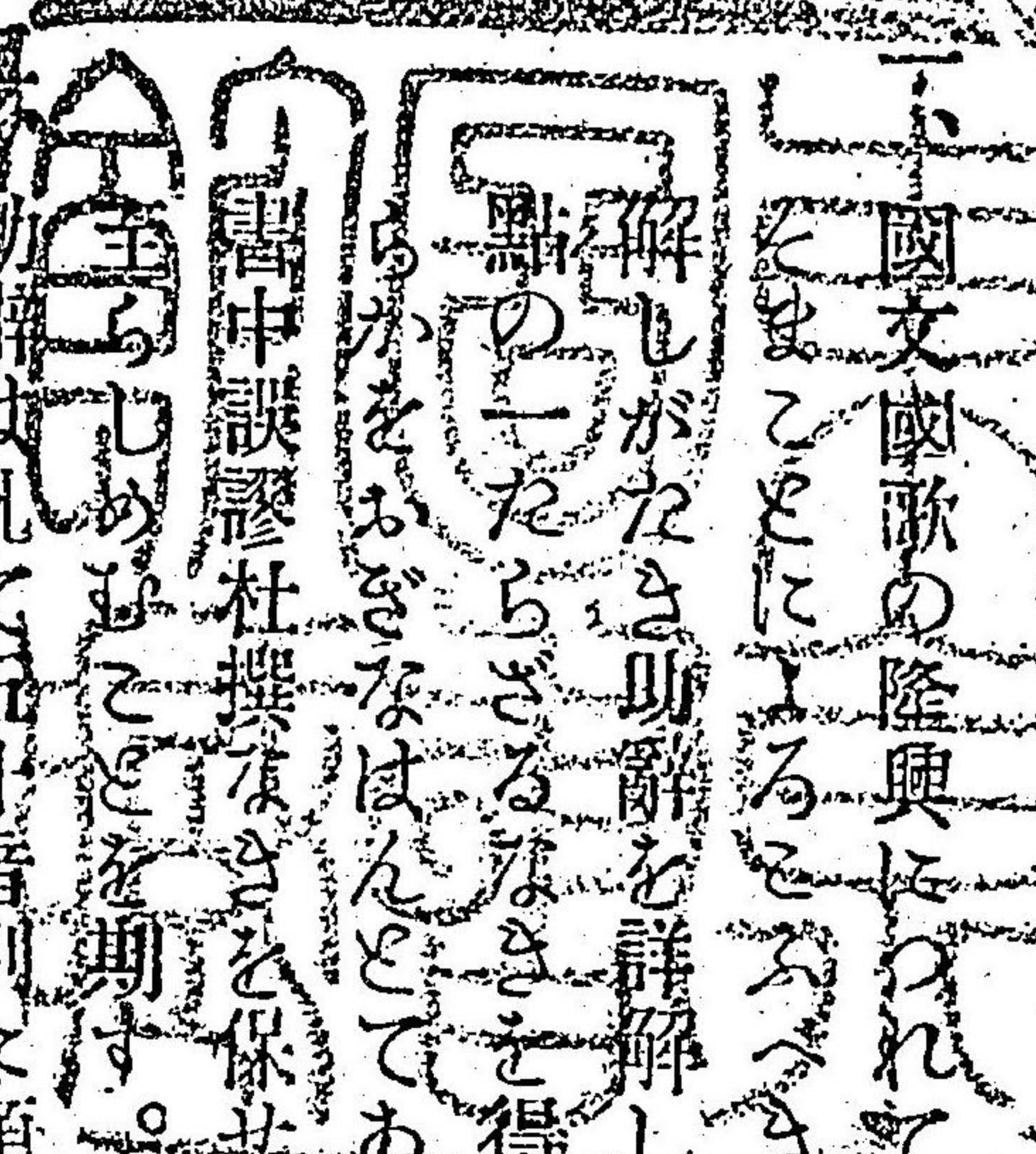
DAC-2233





中掌
日本助辭詳解

凡例



一 國文國歌の隆興にのりて文典辭書などの續々と世に出づること
 多しことによることありて現象なりけれ。されど、ひとり最も
 解しがたき助辭を詳解したる簡便の書の乏しきは、斯道の欠
 點の一たらざるなきを得んや。本書はやがてこの欠點のいく
 らかをなほはんとてあみたるものから、編者の淺學なる、
 書中誤謬杜撰なきを保せず。そはつぎくに更訂して完全に
 主らしめむことを期す。
 二 助辭は凡て五十音別に類集し、これに一々その所屬段階、種
 類意義、用例などを附記し、讀者をして一見了解し易からし
 めん事をつとめたり。

凡例

一

三、助動詞はすべて斷止段のところに於て前項の如くにし。その他の段のところにては用例のみをかゝげたるは、煩雜をいどひてなり。

四、感歎辭・想像辭、などの名稱は、凡て感。想。等と記したり。

五、卷首に助辭總解を出して、國語の分類助辭に關する總体の規則係結の定例などの極めて大概を説きたり、實に大要にしてわかぬところのみ多かれどもなほなきにはまさりぬべし。

六、卷尾に助辭問答を出して混じ易き助辭の用格差別などを辨じたり。類解を熟讀せば了解し得べかめれど、初學者の爲めには、こもまたなきにはまさりぬべし。

廿あまり七とせの彌生の初つかた。

比良山下の書樓に於て

編者識

日本助辭詳解

目次

●助辭總解

●語の分類

●体言の分類

●用言の分類

◎正格作用一覽表

◎變格作用一覽表

◎形狀言一覽表

●用言屬詞

◎下二段佐行屬詞一覽表

◎下二段良行屬詞一覽表

◎變格良行屬詞一覽表

●用言語尾の變化

●助辭の分類

●助辭の小分類

●助辭の變化と所屬と

●備考

(其一) 用言と助辭との接續

(其二) 体言又は命令詞と助辭との接續

(其三) 助動詞と助辭との接續

(其四) 天爾波と助辭との接續

●係結要領

◎助辭類解

か さ け こ さ し す せ そ

た の て と な に ぬ ね の
は へ ま み む め も や い
ゆ よ ら ろ ゑ を

◎附助辭問答

●もとはとの區別

●のどづとの區別

●がとのとの區別

●かどやとの區別

●どの用格

●しとせしとの區別

●しの結辭

- しとたるとの區別
- けるとたるとの區別
- をの不足
- のの誤用
- されざるの誤
- せりとりとの區別
- なるの誤
- てしとにしとの別
- しかどしがとの別
- やはどかはとの辭二ある差別
- ましとまじとの區別
- 自他の誤

助辭總解

芙蓉樓著

● 語の分類

日本語を第一体言、第二用言、第三助辭の三に分つ。

第一 体言は萬物の名稱にて動かぬ語。

第二 用言は事物の動作を現はす爲に動き活く語。

第三 助辭は体言と用言とを連続せしめ又は体言及び用言の方向

を定むる語。

● 体言の分類

体言を小別すれば、第一名詞、第二代名詞、第三副詞、第四接續

詞、第五感歎詞の五種となる。

● 用言の分類

助辭總解

用言を小別すれば第一作用言。第二形状言の二種となる。
 第一作用言はすべて動作をいひあらはす語にて、これに正格と
 變格との區別あり。

(甲) 正格の作用言は第一四段活。第二上一段活。第三下一段活。
 第四上二段活。第五下二段活の五種となる。左表の如し。

◎正格作用言一覽表

段 四				第一變化第二變化第三變化第四變化第五變化 未然段續用段斷止段續体段已然段	備 考
學	打	押	咲		
は	た	さ	か		
ひ	ら	し	き		
ふ	つ	す	く		
へ	て	せ	け		
上欄のか、さ、た、は、ま、 段に變化するもの但し				カ、キ、ク、ケ、又はサ、 シ、ス、セ、など四韻の	

一下	活 段 一 上						活	
蹴 ^ツ	用	射	見	乾 ^ヒ	似	着	降	住
け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ら	ま
け	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	み
ける	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	む
ける	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	む
けれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	れ	め
エの一韻の段にのみ活 き其他は「る」「れ」の添	其の四行にはなし。 の如く活く。阿、佐、多、 はりてきるきれなど						ら、の六行に限り、他の 行にはなし。	

活 段 二 上								活段
得	嵩	老	恨	忍	落	堀 <small>カ</small>	起	綜 <small>ス</small>
え	り	い	み	ひ	ち	し	き	へ
え	り	い	み	ひ	ち	し	き	へ
う	る	ゆ	む	ふ	つ	す	く	へる
うる	るる	ゆる	むる	ふる	つる	する	くる	へる
うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	すれ	くれ	へれ
<p>エ、ウ、の二韻の段に イ、ウ、二韻の段にのみ 活き其下別に「る」「れ」 の音の添ひたるもの。</p>								<p>はりてける けれなど の如く活くを云ふ。</p>

活 段 二 下								
飢	枯	消	集	添	兼	出	瘦	告
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
うる	るる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる
うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ
<p>「る」「れ」の添はりて活 くもの</p>								

(乙) 變格の作用言は第一加行、第二佐行、第三奈行、第四良行の四種となる。左表の如し

◎變格作用言一覽表

第一變化 未然段	第二變化 續用段	第三變化 斷止段	第四變化 續体段	第五變化 已然段	備	考
加行 來 ^コ	こ	き	く	くる	くれ	加行の範圍内に於て正格外の活をなすもの以下同じ
佐行 爲 ^セ	せ	し	す	する	すれ	
奈行 往 ^イ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	
良行 有	ら	り	り	る	れ	

第二、形状言は作用言の外に喜怒哀軽重などの形状を顯はす語にて、これにクシキ活とシクシク活との別あり。左表の如し。

◎形状言一覽表

第一變化 未然段	第二變化 續用段	第三變化 斷止段	第四變化 續体段	第五變化 已然段	備	考
クシキ活 重	く	く	し	き	けれ	
シクシク活 嬉	しく	しく	し	しき	しけれ	

◎用言屬詞

用言の意を變ふる爲めにその語尾に接續する一の詞を屬詞といふ。これに第一下二段佐行の屬詞、第二下二段良行の屬詞、第三變格良行の屬詞の三種あり。第一、下二段佐行の屬詞は左の二種に分れ、何れも他に然せさす

ては命令詞となる。(二)續用段は作用言をいひすゑて体言にする段なり。(三)已然段によつて天爾波を添ふるときは四段活及び奈、良兩行の變格活は命令詞となる。但しよと添へざるも命令詞となる。用言の五變化は右の如し。而してこゝに一言すべきは、作用言と形状言とはいさゝか異なる點あることなり。作用言の第一變化にばや、なん等の天爾波をつゝくる時は希求の意となり、又居名詞は作用言にありては第二變化に於てすることなれども、形状言にありては第一變化にいかなる助辭を添ふるも希求の意とはならず又形状言の居名詞となるは第三變化なり。

●助辭の分類

助辭を大別して第一助動詞、第二天爾波の二類とす。第一助動詞といふは用言の如く其語尾に、五段、又は五段以下三段以上の變化を現はすものにて、其助動詞は用言の第一變化

より第四變化までの語尾又は体言、命令詞に付屬するなり。第二天爾波といふは右の反對にて活らくことはなし。而して其辭は各別に用言の五變化の語尾又は体言、命令詞に付屬す。

●助辭の小分類

助動詞と天爾波とを問はず、總の助辭を小別するときは左の十四種となる。

- 一、 不然辭——打ち消すもの。
- 二、 感歎辭——事物に感じたる情をいひあらはすもの。
- 三、 希求辭——願望の意をあらはすもの。
- 四、 命令辭——他を動作せしむるもの。
- 五、 禁辭——他の動作を止むるもの。
- 六、 疑辭——他に問ひかけ又は疑のまゝに思ふといふもの。
- 七、 想像辭——他を推量していふもの。

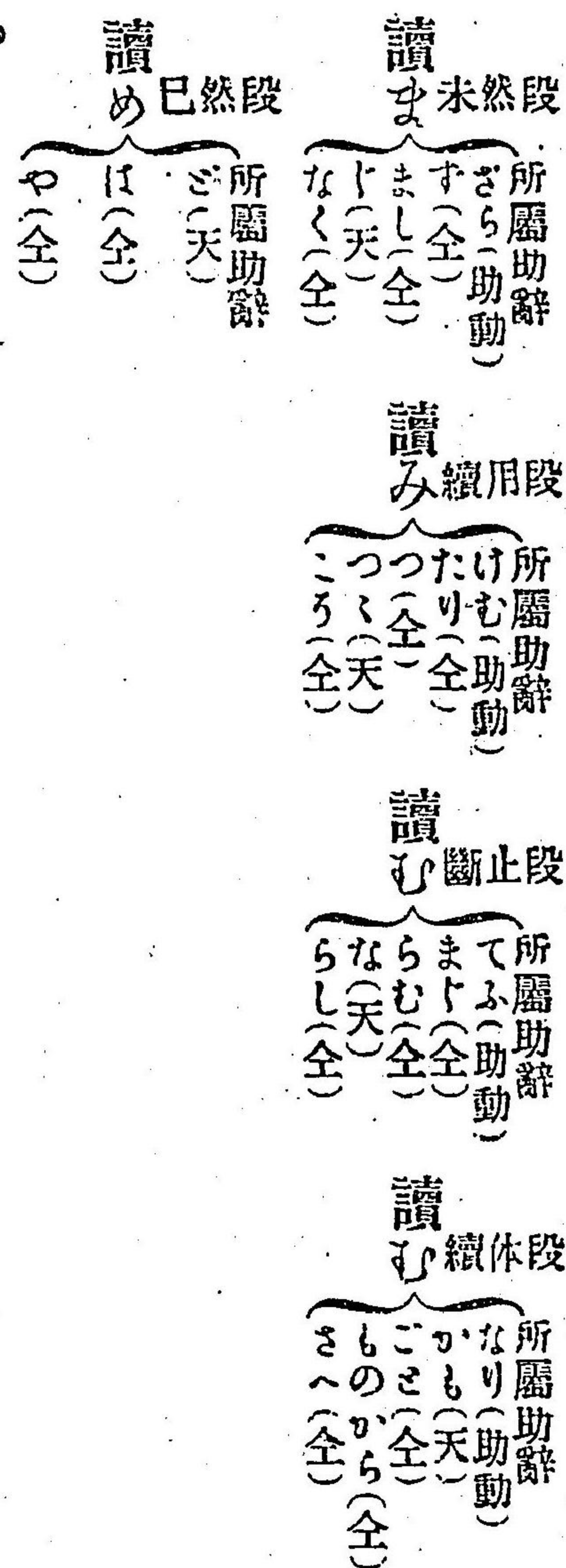
- 八、決定辭——いひ定むるもの。
 - 九、反動辭——その意をうちかへすもの。
 - 十、抑揚辭——いひつゝけたる意を抑へて言外の意を起す者。
 - 十一、接續辭——一度結びたるを更に言ひ起すもの。
 - 十二、連辭——語と語との間にたきて上下の語をつらぬるもの。
 - 十三、強辭——調をしらぶる爲め又意味を強むる爲めに語の上下に置くもの。
 - 十四、雜辭——以上の種類外のもの。
- 助動詞の變化と所屬と。
 助動詞の變化と、助動詞と天爾波との所屬の區別とは、最も熟知を要す。左に一覽表を掲げて之を示さむ。
- ◎變化及所屬一覽表 表中(不)又は(感)などあるは不然辭又は感歎辭といふべきを略したる也

用				用							
段	用	續	屬	所	然	未	未然段	助動詞	變化		
たら(決)	けら(決)	○	○	○	ませ(想)	ざ(不)	ざら(不)	未然段	天 爾 波		
たり	けり	○		む(想)	まく	ざ	ざり	續用段			
たり	けり	けむ(想)	き(決)	む	まし	ざ	ざり	斷止段			
たる	ける	けむ	し	む	まし	ぬ	ざる	續体段			
たれ	けれ	けめ	しか	め	ましか	ぬ	ざれ	已然段			
か(疑、反)かは(反)のみ(雜)から(雜)がて(雜)がてら(全)げ(全)こそ(希、雜)さへ(雜)し(強)しが(希)しが(全)ぞ(雜)だに(全)だも(全)つと(抑)な				じ(不)で(不)な(想)なく(不)なむ(希)に(不)ば(接)ばや(希)よ(命)							

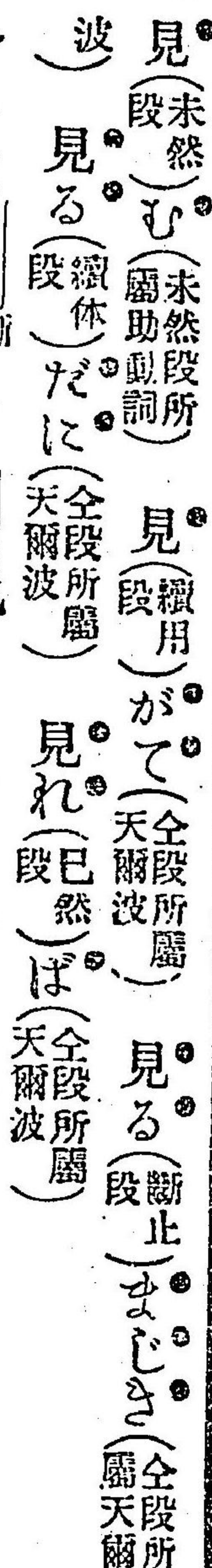
助辭總解

十七

助動詞の變化と、總ての助辭の所屬段とは前表によりて示したり。
 ここにその用言と助辭との接續を例をあげていはん。
 讀むといふ四段活の作用言に所屬の助辭をつまぐるときは左の如し。



見るといふ上一段活の作用言に所屬の助辭をつまぐるときは左の如し。



今もし、讀む止又は見れ已に其段外の所屬助辭を接續せしめんか、其意通ぜざるべし。(例へば讀むに未然段所屬のましといふ助動詞をつまぐるときは讀むましとなり。見れに斷止段所屬のらしといふ天爾波をつまぐるときは見れらしとなるが如し)

(其二) 体言又は命令詞と助辭との接續
 右は用言と助辭との接續なれども、体言又は命令詞と助辭との接續も又ことなることなし。

花といふ体言にその所屬の助辭をつまぐるときは花てふ、花なり、又は、花な折りそ、となる。若し之れに所屬外のけり用言續用をといけんか、花けり、花けるなど何の意なるかを知らがたきに至ら

む。
 行けといふ命令詞に其所屬のてふといふ助動詞又はやといふ天爾波をづけてこそ行けてふ又は行けやとなりて其意通ずべけれ。
 もし所屬外のかも用言續体段又ははし用言斷止段所屬助動詞などをつとけんには、
 行けかも、行けべしなど、文語をなさぬに至らむ。

(其二) 助動詞と助辭との接續

助動詞と助辭との接續は用言と助辭との接續と異なることなし。
 即ち助動詞の已然段には用言の已然段所屬の助辭をつとけ、未然段には又未然段所屬の助辭をつとくるが如し。
 なら、なり、なり、なる、なれ、といふ助動詞に於て、ならば未然段なるからに、用言の未然段所屬の助辭なるましといふ助動詞又ははやといふ天爾波をづけてならまし又はならばやといふを得べし。されども、續用段所屬のけりといふ助動詞又ははがてと

いふ天爾波をづけてならけり又はならがてなどといふべくもあらず。尙ほ左の例を前の一覽表に對照して悟れよかし。

讀ま		飽か		見る		忍ぶ	
未		然		斷		止	
ま	む	ぬ	む	ま	ら	べ	て
く	か	なり	かな	じ	め	く	ふ
こ	な	ぼ	な	ど	ど	な	だ
そ	り	ば	む	む	に	む	に

(其四) 天爾波と助辭との接續

天爾波はある例外的外は總て他の天爾波につくなり。いふとこそ例外的は、

(一)がて、ばかり、は助動詞のぬ、なり、に限りてつとき。
 (二)べら、はなりといふ助動詞にかぎりてつとき。
 (三)と、に、の二の天爾波はてといふ助動詞にかぎりてつとき。
 天爾波と天爾波と合して一の詞をなすものを合辭と名づく。にさへ、にも、にや、などの類なり。

●係結要領

係辭は事物をいひ起す助辭にて結辭は上の係辭をいひむすぶものなり。係結を誤るときは文法を亂して文意通ぜざるに至るべければ最も深く注意すべきなり。
 係辭結辭共に三段の別ありて、第一段の係辭は第一段の結辭にて結び、第二段の係辭は第二段の結辭にて結び、第三段の係辭あるときは第三段の結辭にて結ぶ。
 第一段の係辭は左の如し。

も、に、を、は、ば、の、が、徒係辭のなきといふ

第二段の係辭左の如し。

の、が、ず、や、か、なん、

第三段の係辭は左の一なり。

こそ

さて右に對する結辭の區別は左の如し。

第一段の結辭となるものは、總ての用言と助動詞との斷止段と左の天爾波となり。

- | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|
| なく <small>(不)</small> | じ <small>(然)</small> | な <small>(全)</small> | な <small>(感)</small> | も <small>(全)</small> | や <small>(全)</small> | よ <small>(全)</small> | を <small>(全)</small> |
| かな <small>(全)</small> | かも <small>(全)</small> | か <small>(全)</small> | は <small>(全)</small> | は <small>(全)</small> | は <small>(全)</small> | は <small>(全)</small> | ゑ <small>(全)</small> |
| なむ <small>(希)</small> | ば <small>(全)</small> | しが <small>(全)</small> | も <small>(全)</small> | も <small>(全)</small> | しが <small>(全)</small> | しが <small>(全)</small> | |
| もが <small>(全)</small> | こそ <small>(全)</small> | ね <small>(命令)</small> | よ <small>(全)</small> | や <small>(全)</small> | な <small>(全)</small> | な <small>(全)</small> | そ |
| (禁) | な <small>(全)</small> | や <small>(疑)</small> | か <small>(全)</small> | らし <small>(像)</small> | | | |

な(全) も(全) ず(決) や(反) やは(全) やも(全) か
 (全) かは(全) かも(全) つと(抑) に(全) を(全) さ

(雜) がね(全) がに(全)
 第二段の結辭となるものは、總ての用言と助動詞との續体段及び

左の天爾波なり

らし(像想)

第三段の結辭となるものは、總ての用言と助動詞との已然段及び左の天爾波なり。

らし(像想)

(備考)係結上左の場合を注意せよ。

- 一段係と一段係と重りたるときは一段結をもて結ぶべし。
- 一段係と二段係と重りたるときは二段結にて結ぶべし。
- 一段係と三段係と重りたるときは三段結にて結ぶべし。

- 二段係と二段係と重ることなし。
- 二段係と三段係と重ることなし。
- 三段係と三段係と重ることなし。

日本助辭類解

近江芙蓉樓輯

か

●か ●一、感。(續体段、已然段及び体言所屬天爾波) (甲)悲
 歎の意を現はす。カマアの意——古今集『あかなくにまた
 きも月のかくるゝか云々』(乙)賞歎の意——『あさみどり糸
 よりかくる白露を玉にもぬける春の柳か』 ●二、疑。(續
 用段、續体段、已然段及び体言所屬天爾波) (甲)疑はしく
 定めがたく思ふ心を含む——『夢か現かねてかさめてか』
 (乙)問の意——『君は何を爲すか』『皇孫いづくにかいたりま
 しますべき』 ●上は何、誰、幾、如何などあるときは、こ
 のかを置く。 ●やの部參看 ●三、反。(續用段所屬天爾

波) その意をうちかへすもの——『末代いかでかつし
ませ給はざるべき』●助語——『かくろきかみ』

●係。疑問のかは第二段の係となる——『なごか父を申した
すくる道なかるべき』『ころざしかありけん』

●結。感、疑、反、の かは第一段の結となる

●かな (續体段及び体言所屬天爾波) ●感。俗語ヂヤナアと
いふ意——『定めなき時雨の雲のかゝるかな』不思議にも
侍りしものかな』

●結。第一段の結となる。

●かも ●一、感。(續体段及び体言所屬天爾波) 悲歎又は賞
嘆カマアの意——『見れど飽かぬかも』 ●二、反。(續用
段、續体段所屬天爾波) 反動のかと同意義。
●結。全前。

●かし (斷止段及び命令詞所屬 良行變格の用言に
限り續体段所屬 天爾波) ●決。上
にて定まりたるを再び押し極むるもの——『あるがかし』
『するがかし』

●かは (續用段及び体言所屬天爾波) ●反。その意をうちかへ
すもの——『すべき事は』

●結。第一段の結となる。

●から (續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。によりてとひふ
意義——『色の濃さからに』『さるからに』 ●ものからと
續きたるはもの部にあり。

●が ●一、接。(續体段所屬天爾波) 上の意を結はずして下
へいひつゝくるもの——『尋ねしが知れず』鎌倉のたちに
なん下りしがその後征夷將軍に拜任す ●二、連。(体言
所屬天爾波) 名詞と名詞との間にありて上のを主として

いふ義。『義國が孫』君が世』蝦夷が千島』 ●三、雜。
 (續体段及び体言所屬天爾波) 物二を一に合する意義
 『古今集』見るがわびしき』『聞くが悲しき』 ●『つねに
 はのといふ所をも萬葉にはがといへることおぼし。古今集
 よりこなたは。大かた躰の語の下を受けるはの。用の語の下
 を受るはがなり。但し「わが」かのが「たが」君が「妹が」
 などの類は。躰の語の下なれど。後までもがといへり。其
 外「萩が花」「梅が枝」「淺茅が原」「甲斐が根などのたぐひも
 がといひならへる有なり」(詞瓊論卷七)
 ●係。 雜のがは第一段と第二段との係となる——古今集
 『うつこにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るが
 わびしき』拾遺集『我こそはにくともあらめわがやどの花
 見にだにも君がさまさぬ』

●がね

(斷止段、續体段所屬天爾波) ●雜。

豫カ子といふ用言の

居りたるもの。前よりそれを目ざしてある意味——『婚が
 ね』后がね』君がね』奈良なる人のきつゝ見るがね』

●結。 第一段の結となる。

●がに

(全上)

●雜。 かねの轉じたるものにてその意義同じ

——『卯の花を折りてかざらん身もまがふがに』水まさり
 なば歸りくるがに』

●結。 同前。

●がて

(續用段所屬天爾波) ●雜。

兼カ子の音轉にて難きといふ

意——『流るゝ涙どいめかねつものかねと同義なり』
 『我宿をしも過ぎがてに鳴く』

●がてら

(全上)

●雜。 『かね』の居名詞にらの添はりて轉り

たるもの。兼ねるの意——『わが宿の花見がてらに云々』

き

●き (續用段所屬助動詞) 〆_段 斷止_段 續体_段 し_段 已然_段 の三段に活く。

●決。 今日より昨日のことを云ひ今年より昨年のことなどをいふに用ゐる。 ▲全過去 『月は照しき』 『鶯なき』

●結。 斷止段は第一段。 續体段は第二段。 已然段は第三段の結となる 『檣の板戸もささざりき』 拾遺集 『手枕のすさまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける』 後撰集 『風にしもなにかまかせんさくら花にはひあかぬにちるはうかりき』 ○しの部參看。

け

●けむ (續用段所屬助動詞) けむ_段 斷止_段 けむ_段 續体_段 けむ_段 已然_段 の三段に

活らく ●想。 過去のけりきを推量して未來に及ぼす意義 ▲未來 『古今集』よそにのみさかまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめけん 『源氏物語』 なき人も思はざりけむうちすてゝ夕の霞君さたれとは』 又未來を想像するからんに同じき意味のもあり(古風) 『年はながけん』 『ちらば惜しけん』 『御肴に何よけむ』 古今集以後にも稀に見ゆ。

●結。 斷止段は第一段。 續体段は第二段。 已然段は第三段の結となる 『あれはてゝ風もさはらぬ昔のいほに我はなく共露はもりけん』 『君がへん千代のためとぞ小松原をしほの山もいはひそめけむ』

●けめ けむの第三變化段_{已然} ●けむを見よ。

◎結。 第三段の結——「あふままでの形見とてこそとどめけ
め涙にうかぶもくづなりけり」

●けら けりの第一變化未然段◎未定辭。 他の助辭の添はりかたにより
て不然ともなり想像ともなれ

ば——『有りけらし』◎けりを見よ。

●けり (續用段所屬助動詞) けら未然段けり續用段けり斷止ける續体け
れ已然段の五段に活く。◎決。 けら未定けり未定の部を見よ。

の意にて過去の事を見聞して驚く義。 俗語「ワイといふに
同じ。▲過去——『道もなさまであれにけり』難波がた霞

まぬ浪もかすみけり』(乙)推量の意を含むもの——後拾遺

集『雪ふかき道にぞしるき山ざとは我よりさきに人こざり

けり』新古今集『みよし野のたかねのさくら散りにけり嵐

もしろき春のわけばの』

◎結。 斷止段は第一段。 續体段は第二段。 已然段は第三段

の結となる——古今集『年の内に春は來にけり一年をこぞ
とやいはんことしとやいはん』雪の内に春は來にけり鶯の
氷れる涙いまやとくらん』

●ける けりの第四變化續体段◎けりを見よ。

◎結。 第二段の結——『花の中の花なんさくらなりける』

『山里は冬がさびしさまさりける』

●けれ けりの第五變化已然段◎けりを見よ。

◎結。 第三段の結——徒然草『さて冬かれのけしきこそ秋

にはをさくねとるまじけれ』やり水より煙のたつこそを

かしけれ』

●げ (續用段及び体言所屬天爾波)◎雜。 様子、けしき、風
情などいふ意——『悲しげに』うれしげに』

こ

●こそ

●一、希。(續用段所屬天爾波) こそといふ動詞の轉にてテ、クレイといふ意——萬葉集『夢に見ゆこそ』『我につげこそ』『はやくゆきこそ』 ●『伊勢物語の歌に「秋風ふくと雁につぎこそ」あるこそはこのこそそのうつれるに同じ意なり。然るを越^{エッ}の意と心得るは。古をしらぬひがこと也』(詞瓊論卷七) ●二、雜。(續用段。續体段及び体言所屬天爾波) 多數の物の中よりその一を撰り出だして云ひ定むる意にてぞの一層強きもの——『月こそ澄め』『花こそ咲け』 ●ぎの部參看。

●係。 雜のこそは第三段の係となる 三段係は、この外にはなし。 ●用格の

一。動かぬことにて結ぶもの——源氏物語『なれこそは岩

もるあるじ見し君のゆくへはしるや宿のまし水』 ●用格

の二。言ひかけにて結ぶ——後拾遺集『しるらめや身を人めをはばかりの關に涙はとまらざりけり』 ●用格の

三。言葉をいひのこしてこそとぢむるもの——古今集『津の國のなにはおもはず山しろのとはに逢ひみんことをのみこそ』 この下に言葉とふくめたるものにて希求のころは同くからぬなり。 ●用格の四。

普通の係結——徒然草『たがそらの名残のみぎをしきといひしこそまことにさもおぼねぬべけれ』『人はかたちありさ

まのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ』 ●結。 希のこそは第一段の結となる。

●ごと (續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。 (甲)如しといふ

意——『思へりしごと』『花のごと』 (乙)事物に一々附屬するとの意。毎にの略——『朝ごと清めて』『木ごと咲く』

る

●と (斷止段及び体言所屬天爾波) ●雜 俗語ヨナアといふ意義——『見るがわびしさ』聞_くが悲_しさ ●助語 さむしろ。

●結 第一段結となる。

●さへ (續用段、續体段及び体言所屬天爾波) ●雜 添の義にて、これの上にそれを添へていふ語——古今集『うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ』神皇正統記「御みつから旗の銘をかこしめ給ひさまくの兵器をさへ下し給はり」

●ざら ざりの第一變化未然段——『咲かざらん』見ざらんには ●ざりを見よ

●ざり (未然段所屬助動詞) ●未然段 ●續用段 ●斷止段 ●續体段
 ●已然と活く。 ●不 ずの不然辭にありの動詞の合して約りたるものにてナイデアルといふ意されは命令辭ともなる——『聞かざりさ』知らざりし』

●結 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる。

●ざる ざりの第四變化續体段——『知らざる時に』見ざる間に』

●結 第二段の結。 ●ざりを見よ

●ざれ ざりの第五變化已然段——『讀まざれば』咲かざれば』あ

●結 第三段の結。 ●ざりを見よ

●し 一、強。(續用段、續体段及び体言所屬天爾波) ぐに
 似てそれととり出で、いひ強むるもの。『花しなれば』
 『月し清ければ』我どしいへば。 ●二、決。(續用段所屬
 しは變格加行佐行の作用言に限りて未然段に屬す。但し加行の方は續用段に屬するともあり。助動詞) さ^段斷止^段續体^段し
 か^段己然^段の二段に活らく。 今日より昨日のことを云ひ今年
 より昨年のことなどをいふに用ゐる。▲全過去。『あり
 し』散りし』咲きし』坐せし』示し』 ●この部を見
 よ。

●結。 決のしは第二段の結となる。『みどりなるひとつ
 草どが春は見し』花の色どが我は見し』

●しか さの第三變化^段己然^段 ●さ又はしを見よ

●結。 第三段の結。『月こそ見はしか』

●しが (續用段所屬天爾波) ●希。 俗語タイモノヂヤとい

ふ意。『旅寐してしが』花見してしが』

●結。 第一段の結となる。

●しがな (全上) ●希。 しがに同じ。『見てしがな』得て
 しがな』

●結。 第一段の結となる。

●じ (未然段所屬天爾波) ●不。 未來のことを推測して打ち
 消すもの。俗語ナイデアラウといふ意。▲未來。『あら
 じ』知らじ』見じ』

●結。 第一段の結となる。

す

●すら (續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。 それの轉にてやは
 り、なほの義。俗語さへに同じ。『草木すら春にはなべ

て『鳥すら時をわすれぬを』[◎]さへ、だにを参照せよ。
 ◎未然段所屬助動詞) ず^{未然段} 續用^{未然段} 斷止^{未然段} ね^{未然段} 已然^{未然段} の五段に活く。◎不。動作を打消してナイといふ意義。『知らず』見ず』[◎]言語上の跨續となる。『白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり』
 ◎結。斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる。『人は來ず』花も咲かず』

せ

◎せり (体言所屬助動詞) せら^{未然段} せり^{未然段} せる^{未然段} せ^{未然段} せれ^{未然段} 已然^{未然段} の五段に活らく。◎決。爲而有の意にて爲といふ動詞の如き力を持つ。『紅葉せり』霞せり』[◎]増せり 咲せりなど四段活作用言にせりの屬したらんやうに見ゆれ

ど、このせりは体言所屬のものなれば作用言には屬せざるなり。

さて増せり 咲せりなどいふは變格良行の別格なればこの場合のせりは語尾なり。混することなかれ。◎助辭總解「言語の分類」を看よ。

◎結。斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる。『新古今集』はつ雪のふるの神杉うづもれてしめゆふ野べは冬こもりせり』夫木集『ひもろぎは神の心にうけてけりひらの高根もゆふかづらせり』

◎せら せりの第一變化^{未然段} せりを見よ。
 ◎せる せりの第四變化^{未然段} せりを見よ。

◎結。第二段の結とある。『本のあるじやおもがはりせる』

●せれ せりの第五變化段已然 ●せりを見よ。

●結。 第三段の結となる。

ろ

●ぞ 一、決。(續体段所屬天爾波) 上にて定まりたるを

再び押し極むるもの。かしと同意義——『御どがめあるべきぞ』『思ふばかりぞ』 ●二、雜。(續用段及体言所屬天爾波) 多數のものゝ中にて他事他物に拘はらず一事物を親しくさしていふ意義。こそよりは輕し。俗語コレコノ通リアレアノ様コなど譯すべからむ——徒然草』とのもりのとのすみかに歸りてぞさらになしきとはははかるべき』 ●こそとなむとを見よ。

●結。 決のそは第一段の結となる。

た

●た ●助語——『たよわき』

●たら たるの第一變化段未然 ●未定辭。 他の助辭の添はりかたにて

は『さきたらん』●たりを見よ。

●たり (續用段及び体言所屬助動詞) たら段未然 たり段續用 たり段斷止

たる段續体 たれ段已然 の五段に活らく。 ●決。 甲) ありの約り

たる意主に体言に接 續する場合 ▲現在——『父たり』『臣たり』 乙) て

ありの約りたるにて過去の事の現在に残りたるに用ゐる

ては現在にてあり ▲過去——『みよし野のみかきが原をかす

は過去なれば』 『文を書きたり』

●結。 斷止段は第一段。 續体段は第二段。 已然段は第三段の

た

結となる——金葉集『なはしろの水はいなるにまかせたり
たみやすげなる君が御代かな』

●たる たるの第四變化續体段——『文を書きたる時』『助辭解を
讀みたる人は』 ●たりを見よ。

●結。 第二段の結となる——躬恒集『衣手ぎけさはぬれた
る思ひねの夢路にさへや雨はふるらん』

●たれ たるの第五變化已然段——『歴史を讀みたれば』『花を折
りたれども』

●結。 第三段の結となる——源氏物語『行さきも見ぬ波
路に船出して風にまかさる身こそうさたれ』

●だに (續用段、續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。 セメ
テコレナリトモといふ意——拾遺集『我宿の八重山吹はひ
どへだにちり残らん春のかたみに』 ●すら さへ 参照

●だも (續用段、續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。 だに
もの意——『我をたのまんものにだもあらば』

つ

●つ ●一、連。(体言所屬天爾波) のと同じく上の名詞の意
を狭め下の名詞を主としていふもの——『沖つ白浪』『天つ
空』『國つ社』 ●二、決。(續用段所屬助動詞)て未然段、續用
段、斷止つる段、續体つれ段、已然の五段に活らく。使然ソサクの事の過ぎ去
れるをいひきはむるもの。▲半過去——『人を遣りて』『起
きつ』

●結。 決の斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第
三段の結となる——後撰集『花見にと出にしものを秋の野
の霧にまよひて今日はくらしつ』 ●ぬの部參看。

つゞ

(續用段所屬天爾波)

●抑。(甲)ての重りたるもの慕ひ

は慕ひてくにて多くは下に形容詞を含む。『富士の高根に雪はふりつゞ』古今集『梅が枝にさゝるる鶯春かけてなけともいまだ雪はふりつゞ』(て)ながらの意のもの語の中間にあるとき『見つゞ行く』古今集『春日野の若菜つみつゞよろつ世を祝ふ心は神ぞしるらむ』●意義上の跨續となる。『かくしつゞどにもかくにもながらへて』

●結。第一段の結となる。

て

て

(續用段所屬助動詞)

つゝの第一、第二の變化未然段と續用段と

決。未然段のては他の助辭の添はりかたにより想像又は不然となる『花を見て歸る』『月をふみてゆく』『咲かしてむ』●つを見よ。●言語上の跨續

となる。『雪ふりて年のくれぬる』『雨ふりて庭にたまれる』

てふ

(斷止段及び体言、命令詞所屬助動詞)

てふ斷止てふ

續用段へ已然の三段に活らく。●決。てへは命令辭さもなるなりてふはど

いふの約りたるもの。歌に用ゐる。▲現在。古今集『思ふてふ人のことろの云々』『あはれてふ事云々』

●結。斷止段は第一段。續用段は第二段。已然段は第三段の結となる。

てへ

てふの第三變化已然

といへの約りたるもの命令辭もなる

『今更にとふべき人もれもほはせずやへむぐらして門させりてへ』●てふを見よ。

●結。第三段の結となる。拾遺集『むかしより名高きやどの言の葉はこの本にこそ落とさるてへ』

●てむ (續用段所屬助動詞) てむ[●]斷止[●]てむ[●]續体[●]てめ[●]已然[●]の三段に活く。●想。しかせむと願ふ意義。▲未來——『今日よく見てむ』『讀みてむ』

●結。斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる——後撰集『深みどり染けん松のくにしあらばうすき袖にも波はよせてん』古今集『ありと見てたのむがかたきうつせみのをよばなしとや思ひなしてん』

●てめ てむの第三變化^{已然}段 ●てむを見よ。

●結。第三段の結となる——古今集『ちりぬればこふれどまゐるしなきものをけふこそ櫻をらばをりてめ』

●てし ●合辭。過去のとしとの二助動詞を重ねたるものにて過去を確といひ定むる時に用ゐる。なほたりき、にたりと同例なり。但てしは使然^{ワザカ}のことにておのづからの場合

●てき てしに同じ——『白雲のみな一むらに見ゆしかど立出て君をおもひそめてき』

●で (未然段所屬天爾波) ●不。不然のずとしての約りてなれるもの——『知らで過さん』『あはで歸らん』拾遺集『櫻ちる木のしたかげは寒からで空にしられぬ雪がふりける』

と

●と ●接。(斷止段上一段の作用言及形状言に限及體言、命令詞所屬天爾波) 語、意共に切れたるを更に言ひ起す意義。(甲)夫れと定むる意——『攝政し給ふと見えたり』『三笠と』

いふ山』(として)の意』『花と見る』『雪と見む』(丙)の如くの意』『花と降り来る』『雪と散り行く』●雜。(續体段及び体言所屬天爾波) それとこれとを對比していふに用ゐる』『月と花とは』『行くと行かぬとは』●上。下共にどを置く例なり。『花と雪は』などいふは非にて雪の下にもどを入るゝを要す。

●とて 天爾波接續の特例なり、どの天爾波とての助動詞との接續にはあらずして、といひてのいひ言_{作用}を略したるもの』『さくら花ちらばちらならんちらずとて云々』

●と (已然段所續天爾波) ●接。 上の意を結び果てずして下へいひつゞくる意義。どもに同じ』『聞けどわからず』『同じ花なれど香氣すくなし』

な

●な ●一、感。(斷止段所屬_{良行變格の作用言に}天爾波) ヨナアの意』『ふくに散りぬる紅葉かなしな』『あだなりな』●二、禁。(續用段、斷止段_{良行變格の体用言に}) 勿れの意』『泣くな』『恨みな』 ●三、想。(未然段所屬天爾波) 自らしかせんとする場合。むと同意義』萬葉集『あそびくらさな』『もみぢ手折らな』『かざしにしてな』『君によりな』●此な古事記日本紀の歌にもあり。いづれも皆んと同意也。てなはてん。なまはなむ也。ことさまにいへる説どもあれども皆かなはず。たふなをんにかへて心得る外なし。但しんはみづからの事にも。又他の上にもわたりていふを。此なはたど自まかせむとする事にのみいひ

な

て。他の上をおしはかりうたがふやうの事にいへる例はなし。これんどのたがひめ也。んはむこ (詞瓊綸卷七) ●四、

決。(續用段所屬天爾波) 過去のぬの變化なほ想像辭なれども決辭のぬの變化

なれはしけら 『行きなば』 『歸りなば』 ●ぬを見よ。

●結。決の外は第一段の結となる。

●ながら (續用段、續体段及体言所屬天爾波) ●雜。(甲そ

のまゝなるをいふ意味) 『枝ながら手折りてさせば』 『神

世ながらの』 (てなれどももの意) 『我子ながら我が思に

まかせず』 『我身ながら心にまかせず』

●なく (未然段所屬天爾波) ●不。ぬの延りたるもの

『見なくに』 『聞かなくに』

●結。第一段の結となる。

●なそ (續用段及び体言所屬天爾波) ●禁。なは勿れそは

それと急がしたるもの——古今集『こひしくば見てもしの
ぼんもみぢ葉をふきなちらしそ山おろしの風』 『夏山にな
くほととぎす心あらば物思ふ我に聲なきかせそ』 ●この
天爾波はなとそとの合併したるにはあらで上になどいひて
そとくるなり。そは決して濁りてよむべからず。濁らん
は其意違へり。

●結。第六段の結となる。

●なり 第六段の第一變化未然 ●未定辭。他の助辭の添はりかたによ

りて不然さも想像さもなる
にが故 『月ならじ』 『來るならむ』 ●なりを見よ。

●あり (斷止段、續体段及び体言所屬助動詞) なら未然 なり

の助辭の添はりかたによりて不然
の五段に活らく。 ●決。なら未然 なり

の助辭の添はりかたによりて不然
の五段に活らく。 ●決。なら未然 なり

の助辭の添はりかたによりて不然
の五段に活らく。 ●決。なら未然 なり

の助辭の添はりかたによりて不然
の五段に活らく。 ●決。なら未然 なり

と行きていささふらはむ』(乙)ニアリの意續体段又は体言につくとき『宗廟の御心をしらんと思はば唯正道をささとすべきなり』

●結。 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる。『人はいふなり』『花も散るなり』『月を見るなり』

●なる なるの第四變化續体段『いふなる』『花なる』●なり を見よ

●結。 第二段の結となる。『今ぞ鳴くなる』『鹿がなくなる』

●なれ なるの第五變化已然段。命令詞ともなる。『花なれ』『聞くなれば』『みやびやかなれ』●なりを見よ。

●結。 第三段の結となる。『徒然草』よろづのことは月みる

にこそなぐさむるものなれ』

●なむ 一、希。(未然段所屬天爾波) 願ひ望む意。俗語

ナラヨイに同じ。『行かなん』『歸らなん』 拾遺集『小

倉山みねのもみち葉心あらば今ひとたびのみゆきまたな

ん』●二、想。(續用段所屬助動詞) なむ斷止なめ 續体

なめ已然段の三段に活らく。過去のなに未來のむの加りたる

ものにてなら同意義。古今集『かたちこそみ山がくれ

の朽木なれこそろは花になさばなりなむ』●雜 (續用

段、續体段及び体言所屬天爾波) ぞと同じくそれを一つ

押へていふ意。ぞといふべきところをなだらかにのどめて

いふに用ゐる。歌には少く文に多し。『雪かどのみなん

おぼけける』『人まるなん歌のひじりなりける』●『今の

世の人の。文とてかくを見るに。此なんのおき所をも誤り。

又その結の辭もみだりにて。とこのはぬがおほきはいか
ぢや。おきこころのたがふさは。たさへば柿本の人まるなん歌のひよりな
りけるといふを。柿本人まるは歌のひよりになん有けるといへばす
べての語の意はるを。今の人ほうのおくべき所をしらで。みだりにおくれ
り。本のこさく「人まるなんといふは歌のすぐれたる人の事といはんさて。人
まるを取り出ていふ辭なり。然るを「ひよりなんといふ時は。人まるの事をい
ふさて歌のひよりなるよしを取り出ていふになる也。是をもてすべてなんの
おきこころの大事なる又語のとぢめにかく事もあり。秋下敏行

朝臣歌の左の注に「此歌はまた殿上ゆるされざりける時に
めしあげられてつかふまつるとなんなどの如し。物語など
に此格ことにねほし。これもづといふに同じき也さなんはこ
ぞといはん」
がし」(詞瓊繪卷七)

●係。 雑のなんは第二段の係となる——『人になんありけ
る』『柿本の人まるなん歌のひじりなりける』

●結。 想のなむの斷止段及び希のなむは第一段。續体段は

第二段。已然段は第三段の結となる——『末の松山波もこ
えなん』『渡らば錦中やたはなむ』

●なめ 想のなむの第三變化已然段——『あかでこそ思はん中ははな
れなめ』 ●なむを見よ。

●結。 第三段の結となる——『深き谷こそ淺くなりなめ』
●なむ なむに同じ。

●一、抑。(斷止段所屬格長行の作用言に
限り續体段に屬す 天爾波) 俗語

ノニマアの意——『我ならなくに』『今年のみ散る花ならな
くに』 ●二、接。(續体段所屬天爾波) 上の意を結び
果てずして下へいひつゞくるもの——『正直なる人になん
ありけるに如何なるものにか云々』 ●三、不。(未然段

所屬天爾波) ずの變化ぬの轉。俗語ナイノアといふ意

『たつきも知らに』『聞かに』『言へば得に』 ●四、

決。(續用段所屬助動詞) ぬの第二變化^{續用段}。自然のこと

の過ぎたるに用ゐる。▲半過去——古今集『花の色はうつ

りにけりないたつらに我身よにふるながめせしまに』『花

は散りにけり』 ●ぬを見よ。 ●五、雜。(續用段、續体

段及び体言所屬天爾波) 用言の働き關係、方行などを示

すもの——『母に向ふ』『聞きに行く』『山に登る』

●係。第一段の係となる——後撰集『人しれずもの思ふころ

の我袖は秋の草葉に^カとらざりけり』『花の梢にやどりき』

●結。柳のには第一段の結となる。

●にし ●合辭。過去のにしとの二助動詞を重ねたるもの

にて過去を確といひ定むる時に用ゐる。但にしは自然の過

^{カンツガラ}

去にて使然^{ワカク}の場合にはてしを用ゐる。▲大過去——新古今

集『八重ながら色もかはらぬ山ぶきのなど九重にさかずな

りにし』和歌所歌合家隆卿『神代よりいく代かへにしをと

めてが袖ふる山のみづ垣の松』 ●てし参照。

●にき にしに同じ——後撰集『君こそととしはくれにき云々』

●にて にしてのしといふ用言の略かりたるにて。天爾波接續

上の特例なり。『橋の上にて』『月のかたむくにて知る』

ぬ

●ぬ ●一、不。(未然段所屬助動詞)

『人ぞ知らぬ』 ●ずの部を見よ。 ●二、決。(續用段所

屬助動詞) 未然^ナに^ニ續用^スぬ^ル斷止^スぬ^ル續体^ニぬ^レ已然^ニの五段に活

く。自然の事の過ぎ去りたるをいひきはむるもの。▲半

過去——『秋は來ぬ』『われ見ても久しくなりぬ』
變化と異なるは。例へば『花は散りつ』といへば風などのため
にちりたるもの『花は散りぬ』といへば時節來りておのづ
から散りたるもの。よく味ふべし。

●結。 ●一、不のぬは第二段の結となる——古今集『櫻花
どくちりぬとも思ほえず人のこころが風もふきわへぬ』

●二、決の斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第
三段の結となる——古今集『春の野にわかなつまんとこし
物をちりかふ花に道はまどひぬ』

●ぬる 決のぬの第四變化續体段——『秋が來ぬる』 ●ぬを見よ。

●結。 第二段の結となる——『風の音にうたごころかれぬる』
『月がくもりぬる』

●ぬれ 決のぬの第五變化已然段——『行きぬれ』『散りぬれ』

●結。 第三段の結となる——『大かたの秋くるからにわが身
こそかなしき物と思ひしりぬれ』

ぬ

●一、不。 すの第五變化——『人こそ知らぬ』 ●すを

見よ。 ●二、命。(未然段。續用段所屬天爾波) しかな

せと命令する意——『疾く去りぬ』『早く行きぬ』

●結。 不のぬは第三段の結となる——『花こそ散らぬ』『君
こそ知らぬ』 命のぬは第一段の結となる。

の

●の (体言所屬未然段所屬むといふ助動詞と續用段所屬のて 天爾波) ●
一、連。 語と語との間に置き上の語の意をせばめ下の語を

の

主としていふもの——『月の花』『梅の花』『生きての世』
 絶むの心』●二、雜。意は連辭のと同じ——『袖の乾ぬ間も云々』●意義上の跨續となる——『岩打波のれのれのみくだけて』

◎係。雜ののは第一段と第二段との係となる——『花には袖のぬれぬなりけり』古今集『みよしの山白雪ふみわけて入にし人の音づれもせぬ』●が参照。

◎のみ (續用段、續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。バカリといふに近き意——『來りしのみならず』

は

◎は ●一、接。(續体段及び体言所屬天爾波) 上の意を結び果てずして下へいひつゝくるもの——徒然草『新古今には

残る松さへ嶺にさびしきといへる歌をういふなるはまことにすこしくだけたるすがたにもやみゆらん』●二、雜。

(續用段、續体段及び体言所屬天爾波) 此と彼とを取分ち

ていふに用ゐる——『年のうちに春は來にけり』マダ霞なども
立す鶯なども鳴かぬけれどもまづ春といふ時はか『秋は來にけり』また露も置かず草花
も咲ぬけれどもまづ秋といふ時はかりは來たわいといふ意。

◎係。雜ののは第一段の係となる——『花は咲きけり』『身は老ひにけり』

◎はや (續体段及び体言所屬天爾波) ●感。俗にハマアと

いふに同じ——拾遺集『君がすむやどのこするのゆく〜どかくるままでにかへり見しはや』●此ははわの如くよむ也。

◎結。第一段の結となる。

●はも (体言所屬天爾波)

●感。

はやに同じ——古今集

『ささの葉にふりつむ雪のうれを重み本くたちゆく、我さかりはも』『水ぐさの岡のやかたに妹と我とねての朝けの雪そふりはも』

◎結。 同前。

●ば (未然段、已然段所屬天爾波)

●接。 接のはと同じ。

(甲)過去の場合——『花散るなれば』『我餘黨なれば』 (乙)未來の場合——『月出でなば』『彼が餘黨なれば』 ●意義上の跨續となる——『君わたりなばかぢかくしてよ』 係

◎結。 第一段の係となる——神皇正統記『かの國に鎮守のつかさをおかれしかば西蕃相通して國家富みさかりなり』

●ばや

(未然段所屬天爾波)

●希。

俗語タイコトヨといふ

意——『歸らばや』『見ばや』拾遺集『思ひしる人に見せばや夜もすがらわか床夏におさむる露』

◎結。 第一段の結となる。

●ばかり

(斷止段、續体段及び体言所屬天爾波)

●雜。

程の意——『曉ばかり憂さものはなし』『大藏卿ばかり耳とさ人はなし』 (乙)俗語バツカリといふ意にて其れのみと指す語——『傘は名ばかり降る雨にもすそぬらさぬ人なかりけり』

●へ (体言所屬天爾波)

●雜。

方向を示すもの。にと同じやうなれどもには直に其物を示しへは其邊を大かたにさす

『前へ行く』『東へ行きけるに』

●**べく** ベシの第一變化未然段 又は第二變化續用段 『行くべく』

●**べく** 見よ。

●**べき** ベシの第四變化續用段 『散るべき』 ●ベシを見よ。

●**結** 第二段の結となる 『かくなんあるべき』

●**べけれ** ベシの第五變化已然段 『飲むべけれ』

●**結** 第三段の結となる 『人こそ見るべけれ』

●**べし** (斷止段所屬) 其行變格の作用言に限り續用段に屬す又べきは上一段活の作用言に限り續用段に屬することあり。 助動

詞) ●**べく** 未然段 ●**べく** 續用 ●**べし** 斷止 ●**べき** 續用 ●**べけれ** 已然の五段

に活らく。●**想** 斯うと假定していふもの。方言べいに

同じ』『行くべし』『歸るべし』

●**結** 斷止段は第一段。續用段は第二段。已然段は第三段の結となる』古今集『こりずまに又もらさ名は立ぬべし

人にくからぬよにしすまへば』

●**べみ** (斷止段所屬天爾波) ●**想** ベシの變化したるもの

にてベキニヨリテの意』古今集『さは山のはこそその紅葉
ちりぬべみよるさへ見よとてらす月かげ』

●**べら** (全上) ●**想** 可きやらの意』『なりぬべらなり』

『立ちぬべらなる』 ●古今集時代の語。

ま

●**ま** ●**助語** 『ま清水』

●**まく** 見よ。 ●**まく** の第二變化續用段 『あまくほしき』 ●**まし** を

見よ。

●**まし** (未然段所屬助動詞) ●**ませ** 未然段 ●**まく** 續用 ●**まし** 斷止 ●**まし** 續用

●**ましが** 已然段の五段に活らく。 ●**想** いさゝか願ふ意味を

ま

含みて動作を推測するもの。俗語アラウに同じ。『見まし』『聞かまし』
 ◎『おほよそましは。んを延たる如く聞えて。大かたんといふと同じ意なり。然れども。んといふべき所を。皆ましといひては。かなはぬことおほし。そのけぢめは。古の歌又文をつらく味ひ見てわきまふべし。然るを後世の歌には。らんなんなどといふべき所をも。みだりにましといへるひがことおほし又まもじを濁りて。まじと唱るもひがこと也。必清べき辭なり。これを濁るから。初學の輩は。不の意のまじと一つに心得て。まざらはすことおほきざかし。』(詞瓊繪卷六)

◎結。 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる。『よの中にたはて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし』『花のごとよのつねならば過してし』

むかしはまたもかへりきなまし ◎ましと結べるは。おほくは上にばといふ辭ある例なり。又ましかばと上にいへば必又ましといひて結ぶべき格なり。

◎ましか ましの第五變化已然段『聞かましか』『見ましか』

◎結。 第三段の結となる。『金葉集』どしくれぬとばかりこそはさかましかわがみのうへにつもらざりせば』

◎ませ ましの第一變化未然段『見ませば』◎ましを見よ。

◎まじ續用 (斷止段所屬良行邊格の作用言に段『見ませば』◎ましを見よ。)
段 續体段に接續す助動詞) まじく未然まじく

みづからの動作を推測してうち消すもの。俗語マイと同意義。▲未來——萬葉集『はりえこそ遠き里までおくりける君が心はわすらゆまじも』『見まじ』『聞くまじ』

◎結。 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の

結となる——『この世には又も見るまじ』『我は聞くまじ』
 ◎『此ことはいやく聞よからぬもの也。さる故に。古への歌文には。これらの外はをさく見えず「見るまじは「見じといひ「たへまじは「たへじといふ。雅言にはありける。但し語の下へつくる時に「見るまじさ云々「たふまじさ云々などいふはつねの事にて。日本紀の歌にすら「よるまじさ川のくま〜など見え萬葉以後の歌文にも有』
 (詞瓊綸卷六)

●まじさ 續体 段 萬葉集『まかなもち弓削の川

原の埋木のあらはるまじさしなあらぬ君』源氏物語『たゆまじさすちとたのみし玉かつら云々』

◎結。 第三段の結となる。 ◎ましを見よ。

●まじく 未然 段 又は第二變化 續用 段 『あるま

じくなん』『あるまじく覺えて』 ◎ましを見よ。

●まじけれ 已然 段 『有るまじければ』

◎結。 第三段の結となる。 ◎ましを見よ。

●まで 變格加行の作用言に限 天爾波(雜。

俗語マデと同意義——『千代まで八千代まで』『有り明の月と見るまでに』『文武の官の衣服の色までも定められ』

み

●み 續体段及び体言所屬天爾波(雜。 ノ故ニの義にて

俗語サニといふに同じ——『露深み』『瀬を早み』 ●助語となる——『みくまの』

む

●む (未然段所屬助動詞) 〇續用む 〇斷止む 〇續体め 〇已然の四段に活く。●想。 俗語ウと同意義。▲未來——『花は散らむ』
 『行かむ』『見む人は』
 ●結。 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる——『我は見む』『君やこむ』

め

●め 〇むの第四變化 〇已然段——『故にこそあらめ』『花こそ散らめ』
 ●結。 第三段の結となる——古今集『夕月夜おほつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見め』●むを見よ。
 ●めり (斷止段所屬 〇良行變格の作用 〇言に限り續体段助動詞) 〇めり 〇續用めり 〇斷止める

段續体めれ 〇已然の四段に活らく。●想。 事物の有さまを推測していふ。俗語ヤウスチャと同意——『花はちるめり』『人はいふめり』

●結。 斷止段は第一段。續体段は第二段。已然段は第三段の結となる——後撰集『いせ渡る川し袖よりながるればとふにとはれぬ身はうさぬめり』後拾遺集『五月雨に日はくれぬめり道遠み山田のさなへどりもはてぬに』
 ●める 〇めりの第三變化 〇續体——『風ぞ吹くめる』『咲くめる』
 ●結。 第二段の結となる——大和物語『花すゝき君が方にぞなひくめるおもはぬ山の風はふけども』●めりを見よ。
 ●めれ 〇めりの第四變化 〇已然段——『有るめれ』『歌ふめれ』
 ●結。 第三段の結となる——『わざとこそくりはなつめれまがり木にはひまつはるゝ青つららば』●めりを見よ。

も

●一、想。(續用段及び体言所屬天爾波) 想のむに同じ

き古語——萬葉集『あひ思はぬ人をやもとなえろたへの袖
ひづままでにねのみしなかも』 ●二、感。(斷止段所屬天

爾波) 俗語カマアの意——『ひとりかもねむ』『あかしか
ねつも』 ●三、雜。(續用段、續体段及体言所屬天爾

波) はの反對にて此と彼とを取合せいふに用ゐる——『月
もすみけり』『花もささ鳥も鳴く』

●係。 雜のもは第一段の係となる——拾遺集『神無月しぐ
れしぬらし葛の葉のうらこかるねに鹿もあくなり』古今集
『あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまぢけ
り』

●結。 感想のなは第一段の結となる。

●もが (續用段及び体言所屬天爾波) ●希。 俗語タイモノヂ

ヤといふ意——萬葉集『わがやどの尾花がうへのまら露を
けたずて玉にぬく物にもが』

●結。 第一段の結となる。

●もがな (全上) ●希。 もがに同じ——古今集『花の木に

あらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな』後
撰集『名にしおはむ相阪山のさねかづら人にまられてくる
よしもがな』

●結。 第一段の結とある。

●ものから (續体段所屬天爾波) ●雜。 モノナガラの意——

『去らむと思ふものからさすがに名殘惜しまれて立ちも
はあがらぬ云々』

●ものゆゑ (全上) ●雑。ものからに同じ』はるかな
るほどにも通ふころかなさりとて人のまらぬものゆゑ』

や

●一、感。(断止段及び体言所屬天爾波) 事物に感ず

るもの。俗語ヨナアの意。但しな、も、よりは輕し』う
らめしや』千歳集『五月雨はどまのしづくに袖ぬれてあな
しはたれの波のうさねや』新古今集『かのが波に同じ末葉
がしをれぬる藤さく田子の恨めしの身や』 ●二、命。(命
令詞所屬) 上の意義を促すもの』鳴けや』行けや』

●三、疑。(續用段断止段及び已然段所屬天爾波) (甲)疑
はしく定めがたく思ふ心を含む^{かこは}』かゝるたぐひに
やありけん』花どや見らん』 ●此のやは大かたに疑ふ

時に用ゐるかば大方は然りと知らるべきほどの處に用ゐる例
なり。(乙)問の意』花さくや』月やとるや』云々には

あらずや』 ●此のやは上に何、誰、幾、などの語あるとき
には用ゐる例なり。かの部參看。 ●四、反。(續用段、断
止段、已然段及び体言所屬天爾波) 決して然らずといふ

意義』古今集『けふこずば明日は雪どがふりなましきに
ずはあり共花と見ましや』後拾遺集『さかざらばさくらを

人のをらましや櫻のあたはさくらなりけり』 ●大方まし
やといふときやと、思ひさやといふときやとはこの反
動辭なり。やはの部參看。 ●五、連。(体言所屬) 語

と語との間にありて上の語を主としていふもの』すが
はらや伏見の里』なまなしや近江の海』 ●これらのた
ぐひは。地名をかさねいふ時に。中におくやにて。のとい

ふに通へり。これは上と下との地名別所なるを。二つならべていふにはあらず。上なるは廣くして。下なるは其中にある地名なり』(詞瓊論卷四) ●六、強。(續体段所屬天爾波) それどとりいでいひきはむる意』『夕月夜さすや岡への』『なには津にさくやこの花』

●係。疑問のやは第二段の係となる——源氏物語『いさらゐはやくの事も忘れじを本のあるじや面がはりせる』古今集『ありと見て頼むがたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてん』

●結。感、命、疑、反、のやは第一段の結となる。

●やは 續用段斷 止段及び体言所屬天爾波) ●反。決して然らずの意。反動のやに同じ——古今集『春の夜のやみはあやなしうめの花色こた見えぬ香やはかくる』『ちる花

のなくにしとほる物ならば我うぐひすにねどらましやは』 ●『すべてやはい。やにはを添たるのみにて。本はたやとのみいふと同意也。故に古はより來るまゝにや共やは共通はしていへり。 こうといふもこうはさ
いふも同じきが如し。 然れども後世になりては。やはたど疑ひの辭。やはは意のうらへかへる辭にて別なるが如くなれる故に云々』(詞瓊論卷四)

●結。全前。

●やも (全上) ●反。やはに同じ——萬葉集『おく山のまきのほしぬき降る雪の降りはますともつちにねかめやも』 ●結。全前。

●い (續体段及び体言所屬天爾波) ●強。強辭のやと同じ

くそれどとりいでいひきはむるもの——『萬葉集』ありちが
たありなぐさめてゆかめども家なる妹いいぶかしみせん』
『わがせこが跡ふみもとめれひゆかは紀の關守いととめて
かも』 ●助語となる——『よさかる』

ゆ

●ゆ (續体段及び体言所屬天爾波) ●雜。 從ヨリの意——『田
子の浦ゆうち出て見れば』

よ

●よ ●一。感。(續体段及び体言所屬 すの助動詞に限り斷止
段に屬することもあり 天爾
波) 俗語ヨナアの意にて感歎のやに同じ——後撰集『た
ははつるものとは見つゝささかしの糸をたのめる心ほそさ

よ』 ●二。命。(未然段及び命令詞所屬天爾波) 上の意
を促すものにて、命令のやに同じ——狹衣日記「早き瀬の
そこのもくずと成にさどあふぎの風よふさもつたへよ』

●三。雜。(續体段及び体言所屬天爾波) よりの意の古
語。ゆに同じ——『萬葉集』をつくはのしげき木の間よ立つ
どりの』

●結。感、命のよは第一段の結となる。

●より (續体段雜段及び体言所屬天爾波) ●雜。 俗語カ
ラに同じ——『上より』『東より』『行き給ひし頃より』

ら

●ら (体言所屬天爾波) ●雜。 語の調をどこのふるに用ゐ
るもの——『佗しら』『野ら』

●らむ (断止段所屬 上一段の動詞に限り續用段に屬することも 助動詞)

●らむ 断止 續用 已然 三段に活らく。 ●想。 俗語デア

ラウと同意 古今集『もみぢしぬらん』『人やさぬらむ』

『花のさくらん』 ●大方のどかまりてらむと結びたるは皆

其事を疑ふにはあらずして、その然るゆるを疑へる也。

●結。 断止段は第一段。續用段は第二段。已然段は第三段

の結となる 古今集『霧立て雁がなくなる片岡のあした

の原はもみぢしぬらむ』『鳴わたる雁のなみだやれちつら

ん物思ふ宿の杖の上の露』

●らめ らむの第三變化 已然 左こそあるらめ ●らむを見

よ。 ●結。 第三段の結となる 古今集『大原やをしほの山も

けふこそは神代の事も思ひいづらめ』

●らし (断止段所屬 變格良行の作用言に限り續用段に屬す又上一天爾波)

●想。 確ならぬことを徹ありて推さはむる意をあらはす。

俗語 ラシイといふに同じ。 ちんの變化し 『夜はふけぬら

し』『散るらし』

●結。 三段とも結となる 古今集『春風のふくにもま

さる涙かなわがみなかみもこほりとくらし』『此河にもみ

ぢいながるれく山の雪げの水がいまゝさるらし』後撰集『松

のねに風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらし』

ろ

●ろ (續用段及び体言所屬天爾波) ●強。 それととりいで

く強むる古語 萬葉集『あらをらは妻子のなりをば思は

する年の人とせを待てどきまさぬ』

ろ

ゑ

●ゑ (斷止段所屬天爾波) ●感。 俗語ヨナアの意の古語。 但しな、もよりは輕し』我はさひしゑ君にしあはねば』

●結。 第一段の結となる。

を

●を ●一、感。(續体段及び体言所屬天爾波) (甲)俗語マアの意』足引の山より出づる月待つと人にはいひて妹まつわれを』(乙)モノマといふ意』古今集』ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿に植て見ましを』 ●二、命。(命令詞所屬天爾波) 上の意を促す。命令のやに同じき古語

萬葉集『舟わたせをとよばへとも』 ●三、強。(体言所屬天爾波) それとどりいでと強むるもの』古今集』立

とまり見てをわたらむもみぢばと雨とふるとも水はまさらじ』 ●四、接。(續体段所屬天爾波) 上の意をひすば

ずして下へつくるもの』云々にてはあらぬをいかなればかくは言ひけん』 ●五、雜。(續体段及び体言所屬天爾波) 物を引よする意』花を見る』人を走らす』

●事物を處分する義を示す場合には他動詞に接し上の例よりの義を示す場合には自動詞に接す 國と去る。故 郷と出づの類 動作のある 地位を示す場合には又自動詞に接す 路と行く 海と渡る。 ●助語。』をつくば』 ●意義上の跨續』いつか千年を我はへにけむ』

●結。 感、抑のをは第一段の結となる。

◎係。 雜のをは第一段の係となる——『月を見る』

附録 助辭問答

●もとはどの別

◎『秋は來にけり』と『秋も來にけり』と。又は『鹿は鳴くなり』と『鹿も鳴くなり』との區別は如何。

『秋は來にけり』『鹿は鳴くなり』は『秋ト云フ時バカリハ來マ
ワイ』『鹿バカリハ鳴クワイ』といふ意、『秋も來にけり』『鹿も
鳴くなり』は『秋マデガ來タワイ』『鹿マデガ鳴クワイ』とい
ふ意にて互に表裏のけぢめあるなり。則ちはは物一を二に分
ち、もは物二を一に合はする天爾波なるを知るべし。

●のとぎとの區別

◎『鶯の鳴く』『花の匂へる』と『鶯が鳴く』『花が匂へる』との區
別を示せ。

のは他事他物に拘はらず其事物の上を軽くさしていふ天爾波にて、そは其事物を強くさしていふ天爾波なり。故に『鶯の鳴く』といふときは『鶯が鳴く』『花の匂へる』といふときは『花が匂フテアル』といふ意なれども『鶯がなく』『花が匂へる』といふときは『鶯ガアレアノヤウニ鳴ク』『花ガアレアノヤウニ匂フテアル』といふ意になるなり。但しのはいと輕き天爾波なるからに、かなの外大かたの結辭ムスビの下に餘意を含むなり。故に『鶯の鳴く』『花の咲きぬる』なども『鶯が鳴クコトカナ』『花が咲イタコトカナ』と見るべきものとす。

●がどよとの區別

◎がどよとは共に連辭なり。今『君が世に』『義國が孫』と『梅の花』『月の光』には如何なる區別あるか。
 がは上の語を主としていひ、のは下の語を主としていふ連辭

なり。故に『義國が孫』又は『君が世』といへば義國、又は君といふ語を主としたるにて、『梅の花』『月の光』といへば花、光といふ語を主としたるなり。

●かどやとの區別

◎疑問のかどやとは區別あるべし。例を擧げて説明せよ。

又、『こはいかなる花なるか』と『こは花なるや』とは共に正格なりや。

それ、かは重くやは輕し。故に上に何、誰、いつて、などいふ疑ひことばあるときは總てかを以て結び、下に右の疑ひことばあるときはやを置くを定則とす。

君はいづこの人なるか。

助辭とはいかなるものをいふか。

のどかとは何程の差別あるか。

君はこの問答を解し得るや。
鶯の初音を聞きしや。

又た。

君やいつこ。

花やいかに。

次に、『こは如何なる花なるか』といふはもとより正格なり。されども、『こは花なるや』に至りては、助辭接續上に誤ありといはねばならぬなり。何といふに。やは續用段又は斷止段所屬の天爾波なり。而して、なるといふ助動詞は、なら、なり、なり、なる、なれ、の五段に活きて、なるは續体段なるからに、續体段所屬のかをつゞけてなるかといひ得べきも、やは斷止段所屬なるを以てなるやとはつゝかすることを得ぬなり。

『こは花なるや』を正すときは『こは花なりや』となる。なりは則ち斷止段なるが故に。

●どの用格

◎左の諸例は何れも誤なきや。

(一) 壯士と青年の實業に於て之を見る。

花をわくると思ひなすとも。(草野集、成章の歌)

我は戀ふると人に告げてよ。(草野集、民子の歌)

(四) 本地十一面觀音にて在しといふ俗説あり(篤胤の玉體)

どには接續辭と雜辭との二種あり。接續辭のは、語、意共に切れたるを更に言ひ起す意義にて、雜辭のはそれとこれとを對比していふに用ゐるなり。さて、

(一)の例は雜辭のとなり。故に『青年』の下にもどをいれて、『壯士と青年との云々』とやうにいはでは、壯士に對するもの

は、青年なりや、はた青年の實業なりやをわけがたし。世間此の誤謬ある文章いと多し注意せでやい。

(二)の例のとは接續のとなり。さて、わくるをどに接けたるは誤なりとす。何といふに、とは斷止段所屬の天爾波なるに

わくるといふ作用言はぬけ、わけ、わく、わくる、わくれと

活らきて、わくるはその續体段にあれば、とを接續せしむ

べきにあらず。もしとを接續せしめんとならば、必ず斷止段

なるわくにつけてわくとといはねばならぬなり。

(三)の例は(二)の例に同じく戀ふとと改めねばならず。

(四)の例も(二)の例に同じ。しといふ助動詞はき、し、しかの三段

に活らきて、しは續体段なれば、斷止段のきにつけて在り

きとせざるべからず。

●しとせしとの區別。

◎千蔭の歌に『くまもなくかたりつくせしよひの雨のふりぬるこ
とをたれかつたへし』春海の歌に『きならせし春の衣をぬきか
へて又しも花にわかれぬるかな』或人の文に『瘦せし時』『失せ
し折にこそ』とあり。いづれもかなへりや。

初めの二語は誤にて後の二語はかなへり。盡す、ならず、の

二語は佐行の四段活にて、盡さ、盡し、盡す、盡せ、

又はならず、ならし、ならず、ならす、ならせ、とはたらき

て盡せ、ならせ、は已然段なり。次に、瘦す、失すの二語は

下二段活にて瘦せ、瘦せ、瘦す、瘦する、瘦すれ、又は失せ

失せ、失す、失する、失すれとはたらきて、瘦せ、失せは續

用段なり。さて、決辭のしは續用段所屬の助辭なれば、『瘦せ

し』『失せし』とはつとけ得れども、已然段の盡せ、ならせにつ

けて『盡せし』『ならせし』とはいひ得ぬなり。必ず續用段

につづけて『盡し』『ならし』とこそいふべけれ。

◎然らば、坐せし、せ(爲)し、といふには誤にて坐し、(爲)しといふべきにや。

否。坐す、す、は佐行の變格活にて坐せ、坐し、坐す、坐する、坐すれ、又は、せ、し、す、する、すれ、とはたらきて、坐し、しは續用段なれば、しにつづくべしと思ふ人もあらむ。されども、變格佐行の作用言は、しの助動詞は未然段に屬するが故に、『坐せし』『せし』とするを正格なりとす。

●『勉強し』『世に處し』などは如何。

總て漢語を活用せしむるときは、佐行變格活によるべき例なり。故に『勉強せし』『世に處せし』とせざるべからず。

●しの結辭

◎しは第二段の結辭なれば『獨り春知り顔なるが心にくし』とい

ふは正格なるべし。如何。

然り。しはまことに第二段の結辭となるなり。されども。しには形狀言クシキ活の結尾なるものと、決辭の助動詞のとの二種あるを忘るべからず。さて第二段の結辭となるものは、助動詞のき、し、しか、とはたらく第二段のしにて、クシキ活の語尾のしはし、き、けれ、とはたらきて、しはその第一變化、則ち斷止段なれば第一段の結とはなるなり。對照の便をはかりて併記せむに。

クシキ活	の語尾	助動詞	第一段結	第二段結	第三段結
			く	く	し
			○	○	き
					し
					しか
					けれ

故に『花がさきし』『人が來りし』などはいふべきも、形狀言の惡しの第二段結はその續体段に於てして『顔なるが心惡

『さ』といふべきなり。

●しとたるとの區別

◎過去のしとたるとには如何なる差別あるか。

しは無形の過去に用ゐ、たるは有形の過去に用ゐるなり。

故に『そのあらはされし書は』とあるときしは書をさしていふなれば必ずたるを用ゐるべき格なり。但し、そのあらはしたる時をさしていふにはしを用ゐて『そのあらはされし時』といふべし。時は則ち無形なればなり。

●けるとたるとの區別。

◎ある書に『云々と驚かしかれけるは千載の上にいぞ』とあり。こはたるといふもけるといふも同じや。

こはたるとあるべき格なり。けるは來經あるの意にて過去の事を見聞して驚くに用ゐる助動詞にてたるは前項にも言へり

し如く有形の過去即ち過去の現在に残りたるに用ゐる助動詞なり。さて、『驚かしかれ』は過去の現在に残りて。今もなは驚かする意なれば、たりを用ゐるこそ正當なれ。

●をの不足

◎『父の仇を報はんものと思ひて』『書なりとも讀まんもの』『彼を救はんもの』と心を定めて』などは格にかなへりや。

もの下にをといふ天爾波を置くべき例なり。とは語意共に切れたるを更に言ひ起す意の接續辭なるに、ものとのみにては語意共に切れざるなり。故に、その下を感歎辭を置きて上の語意を結び、更にとの接續辭を以ていひ起さねばならぬ故に。

●のの誤用

◎『授くるの人』『文を學ぶの迂を嘲りて』『花に遊ぶの樂にしか

ず』月に吟する如きの比にあらず』などののは正常なりや。總て非なり。何といふに。のといふ天爾波はむとてとの二助動詞の外は体言に屬すべきなり。故に『生きての世』『見むの心あり』などとはいひ得べきも『學ぶの』『授くるの』など、他の用言につけむは破格なればなり。

●されざるの誤

○『提供され』『發行されたり』『停止さる』『檢定さる』などは正格なりや。

れ、る、は下二段良行屬詞の第一なり。この屬詞は四段活と奈行、良行の變格活との未然段の語尾に屬して、『推され』『増され』又は『來られ』『去なれ』などいふを得べきも他の行の作用言には屬せしむべからず。前にもいへる如く漢語を活用さするには佐行變格によりて提供せん、停止すなどいふ

を定則とするなり。而して其意を變へんとせば、下二段良行屬詞の第二に接續せしめざるべからず。第二の屬詞は

られ、られ、らる、らる、らるれ、
なれば、必ず『提供せられ』『發行せられ』『停止せらる』『檢定せらる』といふを要す。

●せりとりとの區別

○『押せり』『増せり』『載せり』『瘦せり』は正しき活ざまなりや。前の二語はよし、後の二語は誤なり必ず『載せたり』『瘦せたり』といふべし。

○其理由如何。

押す、増す、などの四段活用言は其已然段を良行變格屬詞につかかせて、押せら、押せり、増せる、増せれ、とはたらかするを得れども、瘦せ、載す、など下二段活用言は右の屬詞

に接かすることを得ざるなり。故に瘦せ、載せ等續用段より所屬助動詞たりにつけて瘦せたり、載せたり、とするを要す。

●此のことはたゞ佐行のみならず、他の行にも往々ある誤なり。注意せでやは。

●なるの誤

◎『國民なるものは』『君子なるものは』などは正當なりや。

なるといふ助動詞には二つの意味あり。(一)作用言の斷止段につづくときはワイの意となり。(二)作用言の續体段及び体言につづくときはニアルの意となる。故に、いふなる。聞くなる、といふときは(一)の場合にて言フワイ、聞クワイの意となり。國民なる、君子なる、といふときは(二)の場合にて國民ニアル君子ニアルといふ意となる。『國民ニアル者』『君子ニアル者』

ハ』などにては其意通ぜざるなり。『國民といふ者は』『君子といふ者は』などと改めでやは。

●てしとにしとの別

◎『散てし花』と『散にし花』とにはいかなる區別あるか。

てし、にし、共に大過去をあらはす合辭なれども。て行の方は使然ラサクのことにいひ、に行の方は自然のことにいふ。故に『君こそずてとしぐくれにし』といへば『君ハ來ズシテ年ハ自然ニ暮レテイマツタ』意にて『いとせくかなきふるしてし』といへば『ナイテフルシタ』意なり。されば『散てし花』は風か雨かが散らした花の意となり、『散にし花』は時が來て花のづから散つた花の意となるなり。古人の歌どもを味ひてさるべし。

●しかどしがどの別

◎しかと清みていふと、しがと濁りていふとさは、その意異なりや。

いたく異なり。しかはき、し、しか、と活らく決定辭にて、しがは希求の天爾波なり。例を以ていへば『花みしてしか』は『花見ヲシタコトデアツタ』の意『花見してしが』は『花見ヲシタイモノヂヤ』の意なり。

●やはどかはどの辭二ある差別

◎古今集に『世の中はむかしよりやはうかりけん』又た『なにかは露を玉とあざむく』とあるやは、かはど『色こそ見ね香やはかくるゝ』又た『我身も共にあらん物かは』とあるやは、かはとは其意差別なきや。

大差あり。前のやは、かはは疑問のや、かにはを添えたるにて、はは軽く見るべきなり。後のは則ち反動のやは、かはに

てその意をうちかへすなり。

●ましとまじとの區別

◎『我は聞くまじ』のまじと『我は聞かまし』のましとはいかなる區別ありや。

まじは斷止段所屬の想像助動詞にてまじは未然段所屬の想像助動詞なり。共に想像辭なれども『まじ』はみづからの動作を推測してうち消す意、『まし』は願の意をふくめて推測する意のものなれば、前者は俗語のマイ、後者はアラウにあたるなり。故に『聞くまじ』は『聞クマイ』『聞かまし』は『聞クデアラウ』と譯すべし。其差異殆んど表裏ならずや。

●自地の語

◎『馬を乗入る事』『威を近隣に振ひしむ』『塵芥を捨つ事』『人を走する事』などは自他の誤なきや。

總てをの事物を處分する義を示すときには他動詞に接すへきものどす。今、乗入る、振ひし、走する、などは自動詞なり。故に『馬を乗入るゝ事』『威を近隣に振はせしむ』『人を走らする』又は『走せさ』などと、他動詞に改めずては自他を誤りたるなり。而して捨つといふは他動にて自他の誤はなけれど、捨つるといふはでは事につゝまがたし。故に『塵芥を捨つること』と改めざるべからず。

明治廿七年八月十日印刷
 明治廿七年八月十三日發行

版 權
 所 有

滋賀縣近江國滋賀郡木戸村大字
 南比良九十五番屋敷

著 作 者 中 村 五 十 一 郎

東京市神田區表神保町貳番地寄留

發 行 者 弦 卷 彦 之 丞

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印 刷 者 熊 田 宜 遜

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印 刷 所 熊 田 活 版 所

東京市神田區表神保町貳番地

發 行 所 六 合 館 弦 卷 書 店

